子どもという驚き

柴坂　寿子

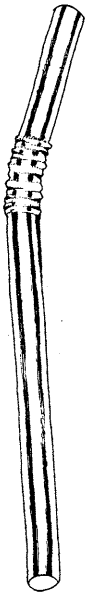
ある保育園での驚き

私が初めて観察に行ったのは東京郊外にある公立の保育園だった。まだはいはいもしない赤ちゃんや、もうすっかり歩ける子までの六人がいる〇歳クラスを中心に見始めた。それまで特に子ども好きというわけでもなく、子どもにこれといって接点もなかった私にとって、初めて間近に見る子ども達という存在は驚きの連続だった。寝そべっている赤ちゃんが足でベビーベッドの柵を握っているのも、初めて見たときは心底びっくりした。

このクラスに初めて行ったときから嬉しそうに

寄ってきて、行くたびに近づいてきて抱きついてきたり、おもちゃをくれたり、記録を取っている私の鉛筆を取り上げたり、何かと構ってくれた子がいた。お醤油顔のおかっぱ頭のKちゃん。そのうち私が保育園に行くと、「今日はKちゃん休みよ」と保育者の方が声をかけてくれるようになった。さらにある日保育者の方に「Kちゃん、先生のこと好きみたいねー」といわれて、そんな風に考えても見なかった私はまたびっくりした。保育者の方が「Kちゃんのお母さんに感じが似てるからかなー」というので、私が「お母さんてどんな方なんですか」と聞くと、保育者の方に「うーん、あっさりしてるかな」といわれ、なぜかちょっとがっかりした。でも子どもになつかれるという初めての経験は相当いい感じだった。私が私であるということを分かっているんだということも不思議だけれど嬉しいものだった。

自由に移動できるのはこのKちゃんという子くらいだったから、子ども達同士のやりとりも起こりにくい状況だった。しかしご飯時に保育者の方達が子ども達をベビーチェアに座らせ、互いに顔が見えるような席に着かせると、状況は一変した。誰かがスプーンでとんとんとお皿をたたき出すと、他の子もそれにあわせてとんとんたたき出し、スプーンがない子は手のひらでとんとんテーブルをたたく。みんなそろってとんとんとん、口を開けて笑い顔の大騒ぎになった。他にも唇をぶーっと振るわせたり、頭を横に振ったり、手を横でぶらぶら振るわせたり、一人がやり出すとそれっと他の子ども達が同じことを一緒にやり出すという感じだった。こんな



小さな子ども達が他の子達といることをこんなにも楽しんでいるというのも本当に大きな驚きだった。

みんなが歩けるようになると目立ってきたのはお昼寝前のかくれんぼだった。始めは窓際のカーテンを使ってのいないいないばーだったのが、そのうちカーテンの陰に何人も隠れて、それを鬼が外からぎゅっと捕まえる、動きの大きい遊びに発展していった。お昼寝前になると決まって誰かがカーテンに隠れ始め、他の子も続々と隠れていく。そしてそのたびのきゃあきゃあ笑い顔の大騒ぎ。それが毎日毎日同じ時間帯に繰り返される。私にとってはご飯時の大騒ぎとともに、「これはいったい何なのだろう」とその後ずっと考え続けるテーマになった。

〇歳クラスの部屋に行くのには一歳クラスの部屋を通り抜けていくので、一歳クラスの子ども達の様子もちらっとではあるが見ていた。一歳クラスも賑やかなクラスだったが、その中に一人だけほとんど話さないおとなしい女の子、Aちゃんがいた。お天気のよいある日、〇歳・一歳が合同でお散歩に出かけることになった。出かけた先の公園で、私はいつものように子ども達からちょっと離れて子ども達が遊ぶ様子を見ていた。ふと気づくとAちゃんが私のすぐそばに座り込んで地面を掘っている。「何でこんな近くに」と驚いたけれど、Aちゃんの安心しきった様子に、そのまま子ども達を見続けた。彼女は地面を堀り、私は子ども達を見る。違ったことをしながらゆっくりと流れる時間を一緒に過ごすという、気持ちの休まる体験だった。次に保育園を訪れたとき、いつものように一歳クラスの部屋を通り抜けようとすると、Aちゃんが鈴の鳴るような小さな高い声で「おはよう」と挨拶してくれた。びっくりした。初めて聞くAちゃんの声だった。

ずっと後になって、違う幼稚園や保育園で、ふと気づくと私のそばに子どもが座っている体験を何度

もすることになった。ちょっと体調が悪かった子や周りの展開の早さについていけないでいる子。きっとその子達にとっては子ども達の輪からちょっと離れている私は自分と同じ仲間に感じられたのだろう。

ある日園庭で子ども達の様子を見ていたとき、ふっと気づくと一歳クラスのYちゃんが太鼓橋のてっぺんで固まっている。はいはいで登って行って、にっちもさっちもいかなくなったらしい。周りを見渡しても保育者の方が見あたらない。走って飛んでいってYちゃんを降ろし、ちょうどやってきた保育者の方に引き渡した。次に保育園を訪れたとき、一歳クラスを通り抜けようとしてYちゃんと目があった。Yちゃんのうるうるした目は「感謝してます」と私に言っていた。五十年近く生きてきて、あのときほど自分が感謝されていると感じたことは後にも先にもない。

また別の日、一歳クラスのある子がおもちゃを独り占めして、それを怒った一歳クラスの子ども達がその子を取り囲んでいた。特に怒っていたのがRくんという男の子で、おもちゃを抱えて離さない子に向かって、「やいやいやいやいやいやいやい」と言葉にならぬ言葉で真剣に非難していた。音は確かに「やいやいやい」でしかなかったけれど、それは私の耳には「みんなのおもちゃなのに独り占めしてずるいぞ」という非難に聞こえた。Rくんには明らかに伝えるという意図があった。まだ言葉が言葉になっていなくても、Rくんは自分自身が持っている手段で非難を思いっきり表現していた。言葉が言葉になっていなくても「非難」は十分伝わっていた。Rくん

自身、自分の言葉が伝わることはみじんも疑っていなかっただろう。

園庭にいるとき音楽がかかると、立てるようになっていた〇歳児達が満面の笑い顔になって体を揺すり始める。一歳児達が部屋から園庭に出たとたん、突然だーっと走り始める。そんな光景にも何度も驚いたものだった。「そこに音楽があるから」「そこに空間があるから」としか言えないような光景だった。

こんな小さな時から、といつも思う。一人の特定の人として相手を見ること。人と同じことをして楽しむこと。人と一緒にいるだけで安心すること。人と小さな出来事を通してつながること。子ども達が何かを伝えようとし、言葉でなくてもそれを確信を持って表現し、それが伝わってしまうこと。子ども達が周りのものから何かを同じように感じ取り、同じように動くこと。それらはどれも私にとって大きな驚きだった。

「子守り」体験での驚き

私が留学したドイツの研究所には、子連れ出勤をしているアメリカ人の女性研究者がいた。世界のあちこちを自分や連れ合いの仕事のために転々としていて、Sくんという子どももちろん一緒に転々としていた。Sくんは初めて会った時は四歳くらいで、小柄でシャイな少年だった。ごっこ遊びが大好きで、なぜだか私とウマがあい、研究所にくると私の部屋に遊びに来るようになった。ある日、Sくんと私は朝からレゴでさんざん遊んで、さすがにもうそろそろ引き取らねばと思ったらしいお母さんがSくんを引き取りに来た。Sくんはまだまだ遊びたい様子だった。私がなんとか遊びを終わりに持っていこうと算段していると、Sくんが突然私に、「このレゴは僕が作ったんだよね。だから僕が壊したって

いいんだよね」というと、あっという間にせっかく作ってあったレゴをめちゃくちゃに壊してしまった。いつもはおとなしい子なので、その勢いに私もお母さんも呆然とした。壊してしまった後、Sくんはとても悲しそうだった。だますようにして無理矢理終わらせようとする私に、裏切られたような気持ちだったのだろうと思う。私もお母さんも深く深く反省した。

一年ほどしてだったろうか、この家族がまた別の研究所に行くことになった。Sくんは私の部屋にやってきて、「あげる」と小さな紙包みをくれた。開けると小さな箱で、中には研究所のあちこちで集めたらしい、フイルムの切りくずや、細かな紙切れがたくさん入っていた。「寂しくなったときにはね、この箱を開けるの。そうすると楽しくなるんだよ」と遠くを見るような目をしてSくんは説明してくれた。きっとそれは君自身のことなんだねと私は思った。まだ五年くらいしか生きてない人がこんな重い言葉を口にすることが驚きだった。何人もの友達と別れてきた悲しい体験が分かるような言葉だった。

二、三年してまたこの家族が研究所に戻ってきた。もう小学生になっていたSくんに「ほら、ああいってこれくれたの覚えてる?」と箱を見せると、「え、僕、そんなこと言った?」と嬉しそうに箱を見て笑った。

Sくんには最初の滞在の時、弟が生まれていた。二度目にあったときにはすっかりやんちゃ坊主になっていた。でもSくんに増して、お母さん子だった。このNくんもお母さんに連れられて研究所にやってきて、ときどき私の部屋にも来るようになった。Nくんのお気に入りは私の膝の上に座り、「日本語」と称して字のようなものを書くことだった。お母さんが迎えに来ても「いい」といって行かず、

お母さんは笑って、「いつも私から離れたがらないのに、あなたはどんな魔法を使ったの？」と私に言った。私はちょっと得意な気持ちだった。ある日いつものように「日本語」の練習をしていると、お兄さんのSくんが学校帰りにやってきて、兄弟二人での遊びになり、そしてあっという間にけんかになった。泣き出したNくんに私が手を差し出そうとすると、Nくんは「ママー」と泣きながら私の横をすり抜けていった。愕然とした私の頭に、なぜか「愛着」という字が浮かんだ。やっぱり大変なときは「ママ」なんだよね、これが「愛着」ってことなんだよねという悟りであった。もちろん「魔法使い」の得意げな気持ちはぺしゃんこだった。

この二人の兄弟げんかはすさまじかった。Nくんが幼稚園に行き始めた頃だったか、二人で私の部屋でゲームをしていて、何が何でも勝ちたいSくんがちょっとずるをしたらしい。Nくんが私にそのことを訴えたが、ずるなのかどうなのか私には分からず、Sくんに問いただしたりしていると、Nくんがかーっと怒って、私に「Sの味方なんだ！」と怒鳴って部屋を出ていってしまった。そしてそれ以来もう二度と私の部屋に遊びに来なかったのである。その徹底ぶりにはほんとうに驚いた。赤ん坊の時はミルクを吐かれたりしながらもせっせと子守りしたのにと、ちょっと恨めしくもあった。

私のもう一つの子守り体験は、ドイツで一時下宿していた家の子どもである。大家さん夫婦が住んでいる一軒家の一部を借りたので、大家さん夫婦の当時四歳くらいだった男の子、Lくんがしょっちゅう遊びに来るようになった。まだ字が読めないLくん

は私が持っていたドイツ語の絵本を引っ張り出してきて、「読んでくれ」という。外国人である私が、子どもとはいえドイツ人に読み聞かせというのも不思議なものだった。でも、Lくんはめちゃくちゃいたずら坊主で、私はいつもやられてばかりだった。そのLくんの唯一の弱みが字が読めないことだったので、喜んで読むことにした。ある時、彼が選んで持ってきた本は昔のしつけ用絵本の復刻版だった。その中のお話の一つは、親指を指しゃぶりしてばかりいる男の子がいて、ある日も指しゃぶりしていると、突然仕立て屋がきてハサミでちょきんと親指を切ってしまうという恐ろしいお話だった。読み終わって、げーっ、怖い話と思っていると、Lくんは絵本をしげしげと見て、「指がない」という。えっと驚いて絵本をよく見ると、手から血は出ているのに、落ちているはずの指は確かにない。よくこんなことに気づくものだと感心しながら、あまりしつけの効果はなさそうだなとも思った。Lくんのご両親はインテリで、このような今や教育的でない本は家にはないようだった。それでも、この本はLくんのお気に入りとなり、その後も私は何度となくLくんのためにこの本を読むことになった。

子ども達にはいつも意表をつかれてきた。こんなに小さいのにこんな深いことをと驚かされてきた。今も幼稚園に通うたび、驚いてばかりいる私である。

（お茶の水女子大学）